



「東京名所案内寿語録」(部分) 三宅半四郎版 明治29年11月

目次 ● 巻頭コラム「藤田嗣章其子嗣治を伴ひ来て面会せしむ」須田喜次次(大妻女子大学教授) / 展示報告 / 地域情報 / 展示のお知らせ コレクション展「東京・文学・ひとめぐり～鷗外と山手線一周の旅」 / 展示会場から / ショップ便利 / カフェ便利 / コラム「日本近代文学館 これまでとこれから～五〇年を歩んで～」信國奈津子(公益財団法人日本近代文学館事務局職員) / 活動報告 / ボランティア活動ノート / 編集後記 / これからの催しもの

巻頭コラム 藤田嗣章其子嗣治を伴ひ来て面会せしむ

二〇一五(平成二十七年)十二月一日の『毎日新聞』朝刊に、東京美術学校(現東京芸術大学)在学中に藤田嗣治(一八八六年—一九六八年)が描いた油彩画が新たに発見された、という報道(藤田嗣治在学中に父描く)がなされた。

それは「父の像」と題されたもので、同記事はその油彩画が「縦60・6センチ、横45・5センチで、軍服姿の男性の半身像がカンバスに描かれている。今年、東京都内の所有者に修復を依頼された芸大が画面をクリーニング(洗浄)したところ、藤田のサインと1909年4月の制作を示す文字が現れた。人物の顔立ちや描法から藤田が、軍医だった父嗣章を描いた真作だと判断した」としている。本作品は、記事が掲載された十二月一日から同月六日まで芸大美術館で公開された。そこでわたしも会場に足を運び実物に接する機会を得、感慨一人のものであった。というのも一九〇九明治四十二年四月の制作だとすれば、まさにこのような姿の藤田嗣章が、息子・嗣治を連れて、父・森林太郎に会いにいらしたからである。

藤田嗣章其子嗣治を伴ひ来て面会せしむ。美術学校にありて画を学ぶ。現に黒田清輝の教室にありと云ふ。
一九〇九年四月一日「鷗外日記」の記述だ。この時点で嗣治満二十二歳、東京美術学校卒業を翌年に控えていた。一方、当時陸軍軍医監であった父・嗣章(一八五四年—一九四一年)は韓国駐軍軍医部長の任にあり、この時は三月二十日から開かれていた軍医部長会議出席のため来日していたのだ。

展示報告

特別展「鷗外と旅する日本」

会期…2018年4月7日(土)～7月1日(日)

今年度、当館は「旅」をテーマに展覧会を展開しています。その第一弾として、春の特別展「鷗外と旅する日本」を開催しました。鷗外が私的な旅や公務のために訪れた地域は、長年居住した東京を除き、北は北海道、南は熊本県、合わせて34道府県にものぼります。本展では、鷗外が訪れた地域だけでなく、鷗外作品に登場した地域も含めた21道府県を地方毎(北海道・東北、関東・中部、近畿・中国・四国、九州)に紹介しました。

明治・大正期は鉄道の誕生と発展により交通網が飛躍的に広がり、旅の在り方が変化した時代です。鷗外の旅もまた、汽船や馬車、人力車を含めた鷗外による旅の記録(旅行記、日記)、家族へ頻りに送られた旅先からの絵葉書などを通して、私たちは鷗外の旅の足跡をたどり、旅の経験を共有することができました。訪れた地域の歴史を学び、文化に触れ、初めての経験を楽しむ鷗外の姿は、現代の私たちの旅の様子と相違ないように思えます。

鷗外は旅先で経験したことや見聞したことを、『棧橋』や『金毘羅』、『粟山大膳』のように作品として昇華することもありました。こうした

だった。後に嗣章没後の一九四三(昭和十八)年四月に刊行されたその追悼集『陸軍軍医中将 藤田嗣章(青木製薬美編 陸軍軍医団)』に寄せた「私の父と私」と題する一文において、「父は人一倍もこの私を可愛がって居てくれた事と奇かに私は慈愛のある父、殊に芸術に理解ある父として他に誇り得る偉大な父だったと今更けなき父が懐しい」と記す嗣治が唯一残した父の肖像画がこの作品に他ならない。

彼は「殊に芸術に理解ある父」とするが、そのエッセイ・回想録等でしばしば述べるように自身が画家の道を進むことにいち早く理解を示し援助を惜しまなかったのが嗣章だった。東京高等師範学校附属中学校在学中であった十二、三歳の頃、早くも終生画家となって身を立たいと決心したものの父親に直接言い出せない嗣治は、その希望を記した手紙をわざわざ同居する父兄に郵送した。それを見た父は息子の願望を即座に承諾し画材調達のために多額の費用を彼に与えたのだという(「私」というもの)。

後のレオナルド・フジタ誕生の間でもある。「私の先輩で忌憚なく云ふ人は次男を画書きにしたは惜しかった。もつと他にすべきことがあつたであらうし又それが出来る人間だといふ。併し本人が画が好きであるのでその希望通りにしたし又私はそれを不可なしと見てゐる」(「家族親族」とは、前掲書に残る嗣章の言葉だ)。
一九〇五明治三十八)年三月、中学校を卒業した嗣治は、直ちにフランスへ渡り画の勉強をしたいと考える。しかし……中学校卒業後ただちに渡仏の望み

を森鷗外先生に計った処、日本画壇には種々の事情があるので美術学校だけでは一通り出てから洋行した方が得策という説があった故学校を終つて後二十七歳の夏、単身水盃を交わして日本を去つたのであった。(「私」というもの)

すぐにもフランスに行きたいと考えていた嗣治に東京美術学校進学を勧めたのが鷗外だったのである。この時鷗外に息子の進路相談をしたのは、嗣章であつたらう。嗣章にとつて、鷗外は「御世話になつた歴代衛生部首脳者」(前掲書)として信頼を寄せていた人物に他ならない。そうしたこともあって父は美術学校卒業間近の嗣治を鷗外のもとに連れてきたのかもしれない。

その嗣治は卒業後の一九一三(大正二)年、念願のパリに渡る。そしてこれもよく知られたエピソードだが、到着早々ピカソの家を訪ねてピカソからルソーの画を見せつけられて「絵画というものはかくも自由なものだ、絵画の範囲というものはいかにも広いもので自分の考慮を遺憾なく自由にどんな歩道を開拓してもよいと言ふようなことを直ちに了解した。その日即座に私は自分の絵具箱を地上に叩きつけて、一歩から遣り直さねばならぬと考へた」(「モンパルナスの美術家の裏」)のだという。この回想はすでに齢五十となり、画家として揺るぎのない地位を獲得していた嗣治の実感であり間違いのないところではあるだろう。しかし、では鷗外が勧めた美術学校進学が全く無駄であつたかといふとわたしはそうは思わない。美術学校で基礎を学んだからこそ、彼はピカソの家で一瞬にして芸術にとつて

を森鷗外先生に計った処、日本画壇には種々の事情があるので美術学校だけでは一通り出てから洋行した方が得策という説があった故学校を終つて後二十七歳の夏、単身水盃を交わして日本を去つたのであった。(「私」というもの)



北海道・東北(青森、岩手、宮城)地方

作品もまた、「鷗外による旅の記録」と言えるかもしれませぬ。一方で、訪れたことのない地域がなくても、豊富な知識と地道な調査、そして創造力によってその地域の特徴や風景を丁寧に描き出しました。
会場では、大きな日本地図や表パネルで、鷗外が旅した地域を具体的に示しました。これにより、鷗外が訪れた地域を断片ではなく一覧することができました。その旅のほとんどが公務であつたことから、鷗外の旅先の多くは師団司令部が所在している地域に近いことも一目で分かります。地図や表パネルをご覧になった多くの観覧者から、居住地、故郷など、ご自身のゆかりの地を鷗外が訪れていることに、驚きの声が上がっていました。

「鷗外による旅の記録」を通して、それぞれが自身のゆかりの地域を再発見し、そして、まだ見ぬ地域の魅力に出会うきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり、ご協力賜りました関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

展覧会期間中に関連講演会を開催しました。

「旅の楽しみ、ヨーロッパ探集」

日時…6月10日(日)14時～15時30分

講師…林丈二氏(路上観察家、イラストレーター)
丹念な路上観察から生まれる「自身の旅の楽しみ方」についてお話しいただきました。

「森鷗外と鉄道の旅」

日時…6月16日(土)14時～15時30分

講師…老川慶喜氏(跡見学園女子大学教授、立教大学名誉教授)
鷗外が利用した碓氷馬車鉄道など、日本鉄道史草創期の鷗外の旅をご紹介します。

須田喜代次 (大妻女子大学教授)

最も大切な「自由」という観念をつかみ取ることができたのではあるまいか。冒頭紹介した「父の像」修復に携わった木島隆康芸大教授の「後に反抗を示すが、若き日の藤田は美術学校の師で画家の黒田清輝の教えに忠実だったことが分かる」との発言もある。

そしてパリ到着早々嗣治がつかみ取った「自由」という観念を、画家としての彼は生涯その生の柱に据えることになる。「人生に自由がなくて何の生甲斐があるろう。芸術は自由そのものでなければならぬ」(「画家の眼から見た世間」)。

こうした嗣治の残した言葉に接すると、それが「学問の自由研究と芸術の自由発展」とを妨げる国は案外ある筈がない(「文芸の主義」『東洋』一九一一年四月)という鷗外の発言と響き合うものであることを感ぜずにはいられない。「鷗外日記」には嗣治は一度しか登場せず、生涯出会ったのもたった一度だけであつた可能性が高いが、二人は芸術家としての本質の部分で共振するものがあつたのではあるまいか。

須田 喜代次

1952年1月生。東京教育大学大学院修士課程修了。東京教育大学附属駒場中・高等学校教諭、文教大学専任講師、大妻女子大学専任講師、助教授を経て、現在同大学教授。森鷗外記念館副会長。津和野森鷗外記念館の文学世界』、『位相 鷗外森林太郎』、『鷗外歴史文学集』第3巻、4巻、『新日本古典文学大系 明治編25 森鷗外集』、『鷗外近世小説集』第4巻において注釈・解題を担当。

※藤田嗣治に関するコーナー展示を行います。詳しくは4頁をご覧ください。

地域情報

根津神社例大祭

9月15日(土)、16日(日)

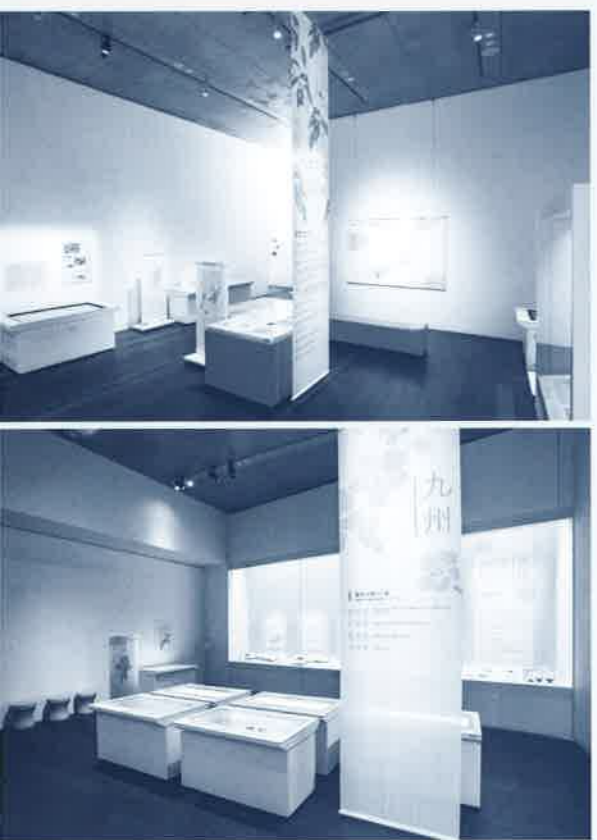
山王祭(日枝神社)、神田祭(神田明神)とあわせて江戸の三大祭と言われ、約300年の歴史を持つ根津神社例大祭。今年度は4年に一度の神幸祭が行われ、文京区の有形文化財に指定される大神輿が渡御されます。境内では、神楽殿で浦安舞と江戸里神楽の三座ノ舞の奉納が行われ、たくさんの方々が観覧されます。例大祭が開催される2日間、当館前には上千駄木町会の神輿神酒所が設置され、祭の活気を間近で感じることが出来ます。



2016年の開催の様子



祭の開催にあわせ、当館では両日20時までの延長開館を行います。館内では津和野町東京事務所協力のもと、津和野の日本酒が楽しめるイベントを開催。根津、千駄木の街中がにぎわう2日間をお楽しみください。



上: 第1展示室
下: 第2展示室

撮影: 佐藤 基

展示のお知らせ



右：幸田露伴著『尾花集』 青木嵩山堂 明治25年
左：永井荷風著『断腸亭雑纂』 粉山書店 大正7年

コレクション展

東京・文学・ひとめぐり

鷗外と山手線一周の旅

東京は、夏目漱石、幸田露伴、国木田独步など、数多くの文学者が住んだ街です。『ころ』の雑司ヶ谷、『五重塔』の日暮里、『武蔵野』の渋谷など、文学者はそれぞれの視点から、街の風景を作品に遺しました。人生の大半を東京で過ごした鷗外もまた、『雁』『有楽門』などの作品や、日記に東京の風物を記しています。これらの描写の中には、現代の私たちにとって馴染み深い風景もあれば、今は全く異なる景色もあります。

本展では、現在東京都心を環状運転する山手線周辺の地域に焦点を当て、ゆかりのある近代の文学作品、文学者や鷗外の足跡を館蔵資料から紹介します。明治大正から賑やかだった上野や新橋、当時は郊外だった新宿や渋谷はどのように描かれたのでしょうか。文学者が描いた風景や風物、名所やそこに集まった人々の様子などを眺めながら、東京をひとめぐりします。江戸から東京へと改称されて150年の今年、鷗外と共に時代を超えた山手線一周の旅の始まりです。



山本松谷画「上野停車場」『新撰 東京名所図会』35編 東陽堂 明治41年3月より

森鷗外著『雁』 粉山書店 大正4年



夏目漱石著『ころ』縮刷版(60版) 岩波書店 大正15年

展示会場から

山田美妙筆 鷗外宛書簡

明治24年5月15日付(部分) [405241]

久しく御目にかゝらず渴望の念加はるばかりの処いさゝかこれを漏らすために封書一片御手許まで差し上げます。

相かはらず志がらみの御編輯御苦勞の程察しあげるばかり、思へば志がらみ初刊の頃世はさほどに之をむかへず、わづかに一種、意匠その表紙の色と共に唯何が無し惨憺たる文狂の作、やはり三号雑誌の一として冷遇した事、それが今になって明月乱雲に磨られていく、光り、風いかり、浪嘆き、天地一切がぶちこはれて始めて真価の知れて来たこと、まことに御雑誌のため密かにいたく喜びあげます。嗚呼人生一代の毀譽褒貶た、是名に伴ふだけの付け合はせ、終焉の茶毘一あふり煽つたが最期、たゞ灰！ たゞ舍利！ たゞ雲烟！ 信じてさへ自分が満足すれば別に是をといふ恥も無い事です。

【中略】
過日忽然思ひ立つたま、朝の上野の一番汽車で夢魂をのせて卅里許、東京の俗詩人磯部の空気を一吸ひ吸つて妙義おろしに袷衣の襟を一寸開き、直に飽きて飛びかへれば東京は扱何と無く何處かかはった処のやう。宵に早広小路の瓦斯の光りに川舎がへりの目をうたれ、宛然その心もち、身のまはりは一切詩でした。

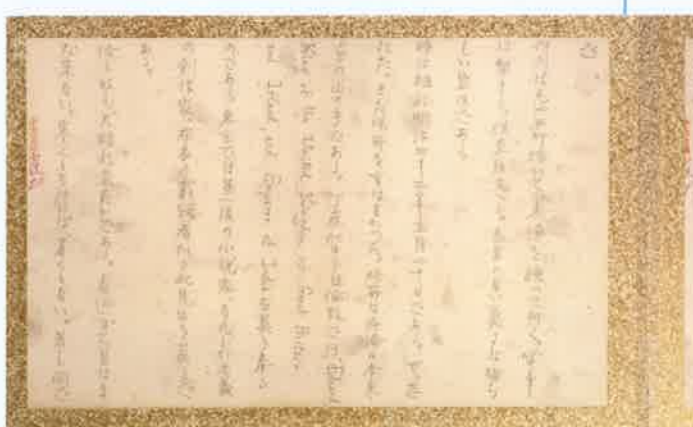
向署折角御加餐折望、感懐至たゞく是だけ。
五月十五日
美妙
鷗外先生 祝北

山田美妙は慶応4(1868)年に生まれ、今年生誕150年を迎えます。

東京大学予備門在学中、尾崎紅葉や石橋忠家らと共に文学同好会・硯友社を結成。明治20年に『読売新聞』で発表した言文一致体の歴史小説『武蔵野』により、新進作家として名声を博し、硯友社の中で最も早く世に認められました。

本書簡は、美妙が雑誌『都の花』主筆を退き、『改進黨新聞』に所属していた頃に発信されたもので、同社の封筒が用いられています。書簡前半は鷗外主宰雑誌『しがらみ草紙』を賞賛する内容になっています。美妙はあまり話題にならなかったと言います。しかし、19号まで発行された現在(明治24年5月15日)は「明月乱雲に磨られていく、光り、風いかり、浪嘆き、天地一切がぶちこはれて始めて真価の知れて来た」と美妙らしい口ぶりで評価しています。美妙は同誌に度々筆を寄せていました。

書簡後半では、美妙の磯部旅行について知ることができます。上野から始発の汽車に乗り、現・長野県安中市にある磯部を訪れたことが分かれます。この旅行は、同年6月13日発行の『改進黨新聞』に『磯部八勝』と題し掲載されました。同作ではここ数年同地を訪れて「極めた」という磯部の名所が紹介されていますが、書簡では旅行に「直に飽きて」帰京したと述べています。この書簡は、同月25日発行の『しがらみ草紙』20号で『尺牘四則』と題される欄に掲載されました。



森鷗外自筆原稿「ル・バルナス・アンビュラン」 明治43年



小山内薫・八千代筆 森家児童書 明治37年7月13日消印

会期●2018年
7月6日(金)―9月30日(日)

〔会期中の休館日〕8月28日(火)、9月25日(火)

会場●文京区立森鷗外記念館 展示室2

開館時間●10時～18時(最終入館は17時30分)

7月9日・10日(月・火)、9月15日・16日(土・日)は20時まで開館(最終入館は19時30分)

観覧料●一般300円(20名以上の団体：240円)

※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料。※東京ふるさと歴史館入館券、パンフレット(押印入)、友の会会員証ご提示で2割引き。※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

ショップ便り

本格的な夏を前に、森鷗外記念館オリジナルの夏グッズをご紹介します！好評販売中の『鷗外Tシャツ』は、万年筆のインク色と、かつて観潮楼から見えたという海の色から着想を得た、紺色がベースになっています。当館ではこの色を『鷗外ブルー』と呼んでおり、ロゴマークやパンフレットなどにも使われています。Tシャツの表面には左胸に大きな『鷗外』の文字を、裏面には背中一面に当館のロゴマークをあしらいました。男女兼用でM、Lサイズを展開。どこに着て行っても目立つこと間違いなしの一品です。あわせてそろえたいのが、NEWSNO.21にも登場した『鷗外書簡手拭い』です。鷗外が親友・賀古鶴所に宛てた「お惚気」(No.2)を参照として知られる書簡が、全面に配されています。Tシャツと手拭いとのセットで、夏のイベントや贈り物にいかがでしょうか。



手拭い 1000円(税込)

Tシャツ 2200円(税込)

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連イベントを予定しております。申込方法は8頁をご覧ください。

講演会

『鷗外が眺めた明治大正の東京』講師 生田誠氏(絵葉書・地域史研究家)
日時 9月23日(日) 祝 14時～15時30分
会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室
定員 50名(事前申込制)
料金 無料(要本展観覧券(半券可))
申込締切 9月7日(金) 必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。
7月18日、8月1日、22日、9月19日
いずれも水曜日14時～(30分程度)
申込不要(展示観覧券が必要です)
※ギャラリートーク参加者に「Old meets New 東京150年」のオリジナルポストカードセットをプレゼント。本事業については、7頁「編集後記」をご覧ください。

同時開催

コレクション展開催中に、左記コーナー展示を開催します(展示室1)。展示観覧券で、コレクション展と共にご覧いただけます。

鷗外忌記念展示

7月9日の鷗外命日(鷗外忌)にちなみ、『鷗外「遺言書」』の原資料を展示します。
〔展示期間〕
7月1日(日)、6日(金)～31日(火)

鷗外と画家・藤田嗣治

今年没後50年を迎えた画家・藤田嗣治と鷗外のつながりを紹介します。
〔展示期間〕
7月6日(金)～9月30日(日)の開館日

カフェ便り

特別展『鷗外と旅する日本』開催にあわせ、モリキネカフェでは昨年に引き続きオリジナルの上生菓子6種を販売しました。今回は、鷗外が旅先から出した絵葉書がモチーフになっています。鷗外は大正5年4月に陸軍を退いたのち、同6年12月に帝室博物館現・東京国立博物館館長に任命されます。翌年から大正10年まで、正倉院曝涼(虫干し)立ち合いのため毎秋奈良に滞在しました。鷗外はまだ幼かった次女・杏奴に宛て、毎日のように観潮楼に手紙を送ります。手紙には奈良や京都の名勝が描かれた絵葉書が使用されました。



鷗外筆杏奴宛葉書
左)大正9年11月3日付
右)大正8年11月19日付

上生菓子はこれらの絵葉書から着想を得て創作したもので、灯籠や鳥居、鹿や紅葉などの意匠が見られます。華やかな色彩と上品な甘さが好評で、全種ご購入された方もいっしょに楽しめました。

モリキネカフェでは、夏に向けて限定メニューを販売予定です。お楽しみに！



日本近代文学館 これまでとこれから 〱五〇年を歩んで〱

信國奈津子（公益財団法人日本近代文学館事務局職員）

明治一五〇年、ということばが各所で掲げられている本年、各地の文学館でも明治維新をテーマに展覧会やイベントが予定されているようですが、一九六三年、日本近代文学館が財団法人として発足した際、初代理事長に就任した作家の高見順は、「あと何年かで維新後百年が来る。維新の再評価、それについで日本の近代といふものの検討が歴史学者の間に従来とは違ふ見方で行はれつゝある。私たちの近代文学館の仕事も、大切な資料を蒐集保存することのうちに、日本の近代文学の正しい認識をもたらすものでありたい。さうして明日の日本文化に本質的に貢献する仕事でありたい」と、その抱負をこの年に刊行された小冊子『設立の趣意』の中で述べています。

その四年後、まさに「維新後百年」を翌年に控えた一九六七年四月二三日、日本近代文学館は目黒区駒場の地に開館。

「この文学館は日本近代の精神、世相の歴史宝庫として、あたかも『明治百年』記念事業の、顕著な一つともなった」とは開館を存ぐ初代名誉館長・川端康成のことばですが、以来、五〇年に渡り、近代文学の総合資料館・専門図書館として活動してきました。

設立運動開始後すぐに、各出版社、物故作家の遺族から寄贈の申し出が集まったという資料は現在、一五七件にのぼる文庫・コレクションが収められ、閲覧室では明治期以降に刊行された約二万八千タイトルの雑誌、四八万七千冊を超える図書が、多くの利用者によって、文学にとどまらず、広

く近代日本の文化芸術、社会科学分野の調査研究に活用されています。また、九万点を超える原稿や書簡などの肉筆資料、遺品類は、研究を目的とした特別閲覧サービスや、展示室での特別展覧会を通じ、公開されています。

そして二〇一二年に創立五〇年、一七年に開館五〇年を迎えたのを期に、ホームページや老朽化した展示室のリニューアル、パリ日本文化会館を会場とした「川端康成と日本の美」伝説とモダニズム展の開催、『近代文学草稿・原稿研究事典』の刊行などといった数々の記念事業を行うとともに、創立以来五〇余年を経て、多くの方のご協力により大きなものとなったこの「近代日本」のアーカイブを、今まで以上に広く、多くの方に活用いただけるよう、開かれた施設を目指し、新たな試みに取り組んでいます。

二〇一二年にスタートした文学館の利用ガイドンスツアー「文学館へ行こう！」（年四回・春秋開催）に加え、昨一七年には、高校国語教育の現場と文学館を繋ぐ、教科書採用作品をテーマとする夏季企画展「教科書のなかの文学／教室のそと」の文学と、教職員向けセミナー「教室」と「文学」をつなぐ」を開催しました。夏休みの時期に、教科書で出会う近代文学作品を、発表当時の掲載誌や初版本、原稿などから多面的に読みなおす、というコンセプトで、第一回として芥川龍之介「羅生門」をテーマに開催、第二回の本年は中島敦「山月記」をテーマに六

月三日から八月二五日まで開催の予定です。また、関連企画のセミナーでは、教科書編集委員による館の資料を使ったレクチャーや、展覧会編集委員による展示解説、意見交換などのプログラムをご用意しています。高校生をはじめとする若い世代に文学館を知ってもらい、また文学館を通じて文学と新たな出会いをもってもらおう、というこの試みは、講演会「夏の文学教室」への高校生無料招待と併せ、今後も継続、発展させていく予定です。

そして今年から、館報「日本近代文学館」の紙面をリニューアル、また五月からはホームページを再リニューアルし、各種講座講演会案内のオンライン請求、さらに従来の図書・雑誌検索に加え、文学者の原稿、書簡、筆墨等肉筆資料の所蔵検索が可能になりました。殊に肉筆資料・遺品類のオンライン検索につきましては、長年、研究者を中心とした多くの方にご要望をいただいていた、このほどようやく実現しましたことと、今以上に広く当館の資料を知っていただき、研究に活用していただけることと期待しています。

最後に当館所蔵の海外資料について触れますと、開館に先立つ一九六五年に収められた、時代や書店掘池佐一郎氏蒐集・海外資料約二千点が筆頭に挙げられます。当時「文学館の特色の一つとなる」と期待されたこのコレクションは、自筆原稿、書簡、初版本や海外研究文献等を含み、中でも、海外滞独時代の家族や知友から寄せられた宛書

活動報告

第49回文京つつじまつりに

参加しました！

根津神社では、4月7日から5月6日までの期間、つつじまつりが開催されました。当館も、境内に設置された甘酒茶屋や文京区観光協会にご協力いただき、広報活動を行いました。根津神社から当館までは「藪下通り」と呼ばれる細い一本道でつながっています。藪下通り沿いの当館入口には、観潮樓の敷石と門柱が現在も残っており、東京都指定旧跡として鶴外生前の様子を偲ぶことができます。根津神社からお越しの際は是非この道を通って、かつての観潮樓を感じてください。

ふみの日イベントがスタート！

当館では今年度、毎月23日（ふみの日）に手紙に関するイベントを開催。第一回目である4月23日は、「折り紙カーネーション」を添えて「ありがとうを伝えよう」と題して、オリジナルカードを作りました。エンタランスに設置されたワークショップ会場で、幅広い年代の方々にご参加いただきました。それぞれ趣向を凝らした素敵なメッセージカードが完成しました。毎月23日は当館へお越しください。



不忍ブックストリート

第20回一箱古本市に

参加しました！

4月29日、不忍ブックストリート実行委員会主催による、第20回一箱古本市に初参加しました。谷根干地域をまたがる不忍通り界隈には、書店、図書館、喫茶店、雑貨店、ギャラリーなどが多く軒を連ねます。実行委員会では2005年より、これらを掲載した「不忍ブックストリートMAP」を発行すると共に、一箱古本市を開催しています。一箱古本市は、マップで紹介されているような地域の店や施設の軒先を開放し、店主一人につき一箱分の古本を販売するイベントです。今年も初めて、当館前のスペースが会場の一つとなりました。

館前には、当館の他6軒の店主が参加、不忍ブックストリートの公式キャラクター・しのぼくんの顔出し看板も設置されました。古本市をめぐる方はもちろん、通りすがりの方も足を止め、館前には大きな人だかりが。館内も古本を購入後に展覧会を観覧される多くの方でにぎわいました。



ボランティア活動ノート



3月20日、街歩きイベント「インターナショナル街歩き」を開催し、一般応募の方と一緒に、当館の解説ボランティアの有志が参加しました。この街歩きは、日常で使える簡単な英会話を交えながら、谷根干に遺る鶴外ゆかりの場所をめぐるというものです。当日はあいにくの雨模様でしたが、鶴外に関する情報は森鷗外記念会常任理事・倉本幸弘氏、英会話に関することは英会話講師・小倉Connie国江氏の案内で、楽しい街歩きとなりました。

イベント終了後は、2017年にデビューしたばかりの第3期解説ボランティアと、先輩ボランティアとの交流会をモリネカフェで開催。チームワークも高まり、今後の展望を話し合いました。解説ボランティアによるガイドツアーは、土日祝の13時から15時からの計2回実施しています。国内外問わず、多くのお客様のご来館をお待ちしています。

編集後記

5頁目で紹介した小説家・山田美妙の代表作の一つに、『武蔵野』という作品があります。美妙は作品冒頭で、小説発表時（明治20年）と江戸以前の東京を比べ、「あゝ今の東京、昔の武蔵野。今ハ雖も立てられぬ程の賑ハしさ、昔は閑も立てられぬほどの広さ」と記しています。美妙が生まれたのは慶応4年7月8日のことで、この約10日後の7月17日に「江戸」は「東京」に改称されました。現在からちょうど150年前のことです。

東京都では東京府開設150年を記念して、東京の魅力を見直し、再認識し、東京への愛着を醸成して未来へ継承する事業「Old meets New」東京150年を展開しています。一年を通して都内各所で関連事業が開催されており、コレクション展「東京・文学・ひとめぐり」鶴外と山手線一周の旅もその内の一（つ）です。「Old meets New」東京150年」のホームページでは、当館コレクション展を含む関連事業を一覧することができます。

明治、大正、昭和、平成と変わる景色もあれば、変わらず残っている風景もあります。当館コレクション展や史跡などを通して、鶴外が生きた明治、大正という時代に思いを馳せていただければと思います。



日本近代文学館

東京都目黒区駒場4-3-55
TEL: 03-3468-4181

開館時間 ● 9:30 ~ 16:30 (最終入館16:00)
休館日 ● 毎週日曜・月曜日、第4木曜日、年末年始
特別整理期間(2月、6月の第3週)
閲覧料 ● 300円(展示観覧料含)
展示観覧料 ● 300円、中高生100円(20名以上の団体 一人200円)

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。
★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

7月6日(金)～8日(日)
11:00～18:00
セタイイベント◎
会場：当館前、エントランス
短冊に願い事をお書きいただけます。

7月9日(月) 10:00～17:30
鷗外忌記念行事◎
鷗外の命日(7月9日)に展覧会を
観覧された方に、オリジナルし
おりをプレゼントします。

7月9日(月)、10日(火) 15:30～19:30 (L.O.19:00)
「ドイツワインの夕べ」◎
会場：モリキネカフェ
モリキネカフェメニューに2日間限定でドイツワインが加わります。
また、同日光源寺で開催されるほおずき市にあわせ、20時まで
延長開館を行います。

7月14日(土) 11:00～12:30
鷗外講座応用編 第4回
「鷗外の多面的な活動② 翻訳家としての鷗外」
講師：松木 博氏 (大妻女子大学短期大学教授) 会場：講座室
料金：無料 定員：45名 申込締切：6月25日(月)必着

8月12日(日)、19日(日) 15:00～17:00
文の京ワークショップ「夏休み・読書感想文教室」
対象：中学1～2年生 講師：千葉尊子氏(全国図書館協議会講師)
会場：講座室 料金：1000円 定員：30名 申込締切：7月30日(月)必着
※ご応募は、2回ともご参加いただける方に限ります。

7月16日(月・祝) 14:00～15:30
鷗外忌記念講演会「鷗外LOVE！」
講師：伊藤比呂美氏(詩人) 会場：講座室
料金：800円 定員：50名 申込締切：7月2日(月)必着
講師の近著『切腹考』に綴られる「大好きな鷗外」について、パワフルに
お話いただきます。

8月25日(土) 14:00～16:00
朗読会「加賀美幸子の朗読をご一緒に」
講師：加賀美幸子氏(NHK番組キャスター) 会場：講座室
料金：1500円 定員：50名 申込締切：8月4日(土)必着

7月28日(土) 11:00～12:30
鷗外講座応用編 第5回
「鷗外・漱石・一葉 作品鑑賞①
『青年』鷗外と『三四郎』漱石 一女性との出会い」
講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 会場：講座室
料金：無料 定員：45名 申込締切：7月16日(月・祝)必着

9月15日(土)、16日(日) 17:00～19:30 (L.O.19:00)
「津和野の日本酒を愉しむ」◎
会場：モリキネカフェ 協力：津和野町東京事務所
モリキネカフェメニューに2日間限定で津和野の日本酒が加わり
ます。また、同日開催される根津神社例大祭にあわせ、20時まで
延長開館を行います。

8月4日(土) 11:00～12:30
鷗外講座応用編 第6回
「鷗外・漱石・一葉 作品鑑賞②
『たけくらべ』一葉 一(三人冗語)の評にふれながら」
講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 会場：講座室
料金：無料 定員：45名 申込締切：7月27日(金)必着

9月23日(日・祝) 14:00～15:30
展示関連講演会「鷗外が眺めた明治大正の東京」
講師：生田 誠氏(絵葉書・地域史研究者) 会場：講座室
料金：無料 ※要本展観覧券(半券可) 定員：50名 申込締切：9月7日(金)必着
講師所蔵の絵葉書から、浅草、上野、本郷、銀座など明治大正の
東京の風景を紹介いたします。

◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jp までご応募ください。※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外での使用はいたしません。]



●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00 (最終入館は17:30)

休館日 毎月第4次曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、燻蒸期間等

